

# 短期大学における早期英語教育関連科目について

西村 厚子

2011年4月より全国の公立小学校で外国語活動が必修化され、児童英語やこども英語やその教授法が注目を集めている。また、1994年に開発された児童英語検定の2010年度の志願者は92,755名で、創設以来の累計志願者は120万名を超える。児童英検とは、児童の英語能力の調査・研究を目的とし、児童が英語に親しみ、外国の文化を理解することを目標とする。試験の形式はリスニングで、英語を聞いてイラストや音声を選び、解答欄に○をつける（児童英検HPより）。筆者の居住するマンション集会室でも最近、児童英検の学習教室が行われるようになり、児童英語教育の存在を身近に感じるようになった。

児童英語指導者の需要が伸びる中で、専門的なトレーニングを受けた指導者が不足しているが、現在はNPO法人の小学校英語指導者認定協議会（略称：J-SHINE）が認定する民間資格・小学校英語指導者資格が児童英語に関する国内で取得し得る唯一の資格である。短期大学においても数校が児童英語教師養成プログラムに取り組んでおり、卒業生の多くが教職に就く成功例も見られる。

昨今、短期大学の文系学科において、資格取得のプログラムを設置し、実際の就職に結びつけることは難しい。教員二種免許を取得するための教職課程を維持する短大もあるが、四年制大学に編入して一種免許を取得しない限り、採用試験の合格は難しいというのが現状である。一方で早期英語教育の現場では、若く意欲のある短大生の需要が高まりつつあると言われている。これは就職活動で苦戦している短大生にとって朗報であり、現状を調査してみる価値があるだろう。

現在、児童英語教育、早期英語教育、および子ども英語に関する科目の開講をホームページ等で公表している短期大学は、青森明の星短大（子ども英語概論、子ども英語指導法、子ども英語指導実践演習）、青山学院女子短大（児童英語教育論A・B）、育英短大（Kids English I・II、児童英語教授法、児童英語教材研究I・II）、大阪キリスト教短大（児童英語教育I・II、幼児と多文化理解）、鹿児島純心女子短大（こども英語教育、こども英語活動、英語絵本の読み聞かせ）、カリタス女子短大（児童英語教育研究）、神戸山手短大（児童英語1～3、児童英語インターンシップ、児童英語演習など）、国際短大（児童英語教授法、

児童英語演習)、札幌大女子短期大学部(児童英語入門、英米児童文学入門、英米絵本研究)、十文字学園女子大短期大学部(児童英語教授法基礎、児童英語教授法実践、児童英語指導実習)、上智大学短期大学部(児童英語教育演習、児童英語教育概論)、中国短大(児童英語教授法、児童英語演習)、東京成徳短大(児童英語演習)、常葉学園短大(子ども英語A・B、早期英語教育概論A・B)、鳥取短大(子ども英語ワークショップ、子ども英語教育法)、梅花女子大短期大学部(早期英語教育論、早期英語指導技法演習、GDM指導演習、早期英語教材研究と活用、早期英語指導演習)、文京学院短大(こどものための英語教育科目Ⅰ～Ⅳ:英語教育論、英語教材ワークショップ、英語教育実習)、長崎短大(児童英語教授法Ⅰ・Ⅱ)、名古屋短大(早期英語教育法、早期英語教材研究)、南九州短大(児童英語教育—理論/実践)、武庫川女子大短期大学部(児童英語)、立教女学院短大(児童英語教育)などである。

上記科目を大きく分類すると、教育論、教授法、指導演習、教材研究に関する科目が多くを占め、その他に絵本の読み聞かせ、児童文学、多文化理解などが見られる。小学校児童を主な指導対象とする「児童英語」系の科目が多いが、「こども英語」および「早期英語」と称して児童と幼児の両方を対象としている短大も数校見られる。児童(こども)英語を学んだ学生の就職先としては、児童館、幼稚園、保育園、プリスクール、子ども英語教室、英会話学校などが挙げられている。

青森明の星短大、国際短大、十文字学園女子大短期大学部、上智大学短期大学部、中国短大、常葉学園短大では、J-SHINE認定の小学校英語指導者資格を取得するための講座を開講している。長崎短大は学校独自の認定書(子ども英語教師認定資格)を発行する。大阪キリスト教短大も独自の「児童英語教育プログラム」において修了証を交付する(大阪キリスト教短大HPより)。上記短大の中で、現在も「子ども英語」を独立したコースとして運営しているのは青森明の星短大だけである。同短大の子ども英語コースの入学人数や学生数はホームページ上で公開されていない。

文京学院大では、1970年代に子供英語教室、1986年に短大で児童英語教育ゼミが開講され、付属幼稚園での実習を開始した(アレン:1993)。同短大が独自に修了認定を行う児童英語教育コースが1993年に設置されたが(アレン:1993)、現在はコースの名称が変わり、英語キャリア科の選択科目として前述の児童英語教育科目を複数開講している。また、文京学院大の付属研究機関「子ども英語教育センター」(幼稚園年少児から小学6年生を対象にした英語教室)を幼稚園の英語教育や子どものための英語教育に携わる学生の活動の場としている(文京学院大HPより)。児童英語教育コース設置当初に履修者に対して行われたアンケート調査では、44%が中学校入学以前に英語を習っていたと答えており、児童英語が当時から既に民間で普及していたことが判る。児童英語教育科目の受講目的としては「将来仕事として子供に英語を教えたいから:23.1%」よりも「将来自分の子供に英語を教えたいから:27.5%」が上回っている(アレン:1994)のは興味深い。共働き家庭の増えた現在同様

の調査を行えば、また違った結果が得られるかもしれない。

本学文科英語コースで早期英語教育科目を開講する場合、独立したこども英語コースの設立は考えにくく、また小学校英語指導者養成講座を運営するにはJ-SHINE 認定に数年かかることが推測される。となると、現実的には、本学独自のこども英語教育プログラムを設定して修了証を交付するという形が最も実現性が高い。上記の形態でプログラムを運営する大阪キリスト教短大のカリキュラムを以下に紹介する。同短大の国際教養学科・英語コミュニケーションコースの児童英語教育プログラムは、子供に英語を教えるための十分な英語力と指導者の資質を備えた人材の育成を目的とする。10 時間以上の児童英語指導実習、TOEIC 450 点（及び英検 2 級）などを修了条件として、独自の修了証を交付する。

上記カリキュラムは、①英語力を付ける、②子供を理解し指導力をつける、③児童英語指導実習を行う、④修了証の交付、という 4 段階で構成されている。①では、外国人講師の授業において英語コミュニケーション能力を向上させる。②では、教材や指導方法、幼児教育の知識、教育理論について学ぶ。1 年次に履修する「児童英語教育Ⅰ」ではテキスト『実践家からの児童英語教育法—解説編』を使用して基礎的理論や実践方法を学ぶ。前半の理論編では、児童英語概要、音声教育、発話教育、国際理解教育、児童英語教育の Do's & Don'ts、および国際コミュニケーション能力について取り上げている。後半の実践編では、クラスルーム・イングリッシュ、マザーグース（歌・手遊び歌）、グループ発表（全 5 回）、チャンツ、ゲームを利用した活動、絵本、ハロウィーンに関する活動、エプロンシアター・劇、フォニックス、クリスマスに関する活動、クラス運営・指導者の在り方などについて学ぶ。また、2 年次に履修する「児童英語教育Ⅱ」の前期には、ガイダンスと授業体験、児童英語と小学校英語、大人数クラスとマネジメント、模擬授業の発表、年間カリキュラムの立て方、レessonプランの立て方、ビデオによる授業研究を学ぶ。また、Ⅰで学んだ指導法を組み合わせて学生自身が授業を構成し、グループごとに模擬授業を行う。後期に入ると、付属幼稚園でグループごとに実習とその見学を行う。（大阪キリスト教短大HPより）

日本私立小学校連盟外国語部会研究部が 1992 年に行ったアンケート調査では、全国私立小学校 147 校のうち 126 校で英語教育が行われ、英語教育を受けている児童数は全国で当時既に 200 万人以上と報告されている（アレン：1994）。また、1992 年 10 月の調査では、16 短大における児童英語教育科目が紹介されているが、その中で現在も同科目を確認できるのは常葉学園短大、鳥取短大、文京学院短大、湘北短大の 4 校のみである。その他の短大は閉校、学科の廃止、科目の廃止等によって、児童英語教育科目は現在開講しておらず、全国の短大にとって激動の 19 年であったことがうかがえる。80 年代に既に児童英語関連科目を開講していた短大は複数見られるが、90 年代に入ってもこの分野の調査・研究は殆どなされなかった。（野上：1993）

前述の小学校英語指導者資格を取得するには、J-SHINE の認定を受けた登録団体が主催

する「指導者養成講座」を修了し、その団体より「小学校英語指導者」としての推薦を受けなければならない。受講者自身が研修を受ける団体を決め、受講修了時にその団体の「資格認定の手続き」に従って書類などを作成し、指導者認定審査料とともにその団体へ申し込む。また、研修講座の受講修了のほか、指導時間 50 時間以上の実施経験（英語の指導）を行うこと、英語で授業が行えることが資格取得の条件である。ただし小学校の通常授業での指導経験が 35 時間以上ある場合には、50 時間を満たさなくてもよい。また、50 時間の中に見学の時間を含んでもよいが、見学の時間は 20 時間以内とする。指導経験が 50 時間未満の場合は「準認定指導者」として推薦を受け、指導時間が 50 時間を越えたと登録団体が認められた段階で正資格に書き換えることができる。指導経験の内容については、小学校での経験の有無にこだわらないが、英会話スクール、学習塾、自宅教室、公民館、家庭教師などの経験を含めて、満 3 歳から満 12 歳までを指導対象とする。（J-SHINE HP より）

常葉学園短大の子ども英語コース（2011 年以降ユニット制に変更）は、小学校英語指導者資格取得講座を 2006 年にいち早く取り入れた成功例である。同コースが成功した一つの要因としては、保育科との連携によって、英語コースの学生が小学校英語指導者資格のみならず保育士や幼稚園教諭の資格を取得できる点であろう。また、小学校英語指導者資格の取得に課されている 50 時間の教育実習の受け入れ先を独自のルートで確保している点も大きい。本学（共立女子学園）の家政学部児童学科では幼稚園教諭一種免許状、保育士、小学校教諭一種免許状（平成 23 年度入学生より）が取得できる。本学に併設小学校はないが、共立大日坂幼稚園では児童学科の教育実習を受け入れているので、短大文科と家政学部児童学科が連携すれば、常葉学園と同様の環境を実現できる可能性がある。常葉学園の場合、保育科の方が英語英文科よりも授業料が高いが、二学科の授業料差額分を「教職課程費」として徴収することで、料金の不公平を解決している。また、4 年間で卒業を目指す長期履修制度によって社会人や既卒者にも入学し易い環境を作っている。（鈴木：2011 ②）

本学以外にも、名古屋短大など、児童英語教師養成プログラムを持たない短期大学において、今後の可能性を模索する気運が見られる。短大で児童英語教育プログラムを開講する場合には、模擬授業、授業見学、教材研究、年齢別特徴の把握を学習項目に含めることが重要とされる。幼児や児童に英語を教える際には、綿密な授業計画を立て、複数回の模擬授業を通して現場体験を積む必要があるからだ。更に、子どもを飽きさせない多様で創造的な教材を作り出し、学習者の年齢に合った教授法で授業を行わなければならない。（加藤：2011）

小学校での英語必修化だけでなく、英語を教える私立幼稚園やプリスクール（英語で保育する無認可幼稚園）、子供向け英語塾の増加、児童英検の受験者増加などに伴い、「子ども英語」指導者の需要は益々高まるであろう。常葉学園短大で子ども英語コースを手掛けてきた鈴木克義教授によると、静岡県内では半数以上の幼稚園が英語活動を行い、2 割以上の保育園が何らかの形で英語を導入しているという。また、過去 10 年足らずでプリスクールの数

は17倍以上に増加し、筆者の自宅近くでも見かけるようになった。常葉学園短大子ども英語コース（～2010年）において、幼稚園や民間英語スクールへの就職内定率が100%であったことは、その需要の大きさを裏付けている。早期英語教育の現場で短大卒の資格取得者が歓迎される背景として、震災以降外国人講師の多くが日本を離れたこと、外国人講師がより待遇の良い韓国や中国へ流出することにより、外国人講師だけでは十分な教員数が確保できないこと、日本人教師（特に短大卒）を採用することによって人件費を抑制すれば、一般の幼稚園と同程度の授業料で英語教育が実現できることなどが挙げられる（鈴木：2011 ①&②）。

2011年には新たに保育英語検定試験の実施が開始した。保育英検とは、日本の国際的なグローバル化に対応できる幼稚園教諭・保育士の養成の一環として、乳幼児の保育に必要な英語力を身につけることを目的とし、幼稚園や保育園における子供達や保護者との英語によるコミュニケーション能力を測る試験で、赤ちゃん言葉や幼児言葉に焦点を当て、幼児保育・幼児教育現場に即した英語の習得を特色とする（保育英検HPより）。短大生が目指すとすれば、2級（補助レベル）が妥当であろう。2級試験は筆記とリスニングを合わせて75分で、約2000語の語彙力を基準とする。2級合格の目安は、保育英語に必要な文法知識を有し、園児および保護者とのコミュニケーションと簡単な文章作成ができ、英語だけによる保育において補助的役割を果たせることである。ただし近年は学生の英語力にかなり幅があるので、基礎的学力の低い学生には3級（基礎レベル）を目標とするのが良いだろう。3級は筆記とリスニングを合わせて70分の試験で、語彙力約1000語を目安とする。保育英語の基礎的な文法を理解し、定型的なフレーズを用いた表現で園児とコミュニケーションが取れ、保護者の簡単なトークを聞き取れることが合格の基準である（保育英検HPより）。

児童英語教育プログラムの先駆けである常葉学園短大「子ども英語コース」や文京学院短大の「児童英語教育コース」が現在コースとして存続していないことを考えると、児童英語だけに短大英語科の未来を託すことは難しいだろう。また、常葉学園短大のJ-SHINE資格取得者の就職先の多くが小学校ではなく幼稚園であること、児童英語の講座が多くの短大で既に普及しつつあること、本学が小学校でなく幼稚園を併設していること、保育英語検定がJ-SHINE資格と比較してまだ普及率が低いこと、J-SHINE認定校となるには数年の実績が必要であること（常葉学園短大は2010年に認定）などを勘案すると、本学短大の可能性としては、併設幼稚園との連携も含め、児童英語よりもむしろ保育英語および幼児英語教育に今後の可能性を見るべきかもしれない。全国短大の保育系学科の一部では保育英語を扱う科目がいくつか見られるが、英語系学科のカリキュラムやシラバスを概観する限り、保育英語および保育英検に関する科目を開講している短大は今のところ見当たらず、開講例は少ないと思われる。既に全国の多くの短大に普及しつつある児童英語教育科目と比較すると、保育英語はまだまだ開拓の余地が残された分野であると言えるだろう。まだ殆ど調査報告・研究

がされていない保育英検の問題傾向分析・対策も含め、今後の課題としたい。

<参考文献>

- アレン玉井光江（1993）「短期大学における児童英語教育の一つの試み」『JACET 全国大会要綱 32』 pp.254 ～ 255.
- アレン玉井光江（1994）「短期大学における児童英語教師の養成」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要第 13 号』 pp.101 ～ 108.
- 加藤あや美（2011）「短期大学における児童英語教師養成について」『桜花学園大学人文学部研究紀要第 13 号』 pp.43 ～ 50.
- 鈴木克義（2011 ①）「英語幼稚園・英語託児の必要性と将来性～未来に生きる子どもたちに真の「生きる力」を～」『常葉学園短期大学紀要 42 号』 pp.105 ～ 112.
- 鈴木克義（2011 ②）「英文科から幼稚園に 100 名就職！～子ども英語コースの 10 年～」2011 年 12 月短期大学英語教育研究会・研究発表資料
- 野上三枝子（1993）「大学・短大における小学校英語教師の養成—児童（幼児）英語教育授業科目」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要第 12 号』 pp.63 ～ 75.
- 大阪キリスト教短期大学 H P （<http://www.occ.ac.jp/>）
- 児童英検 H P （[http://www.eiken.or.jp/jr\\_step/index.html](http://www.eiken.or.jp/jr_step/index.html)）
- 社団法人保育英語検定協会 H P （<http://www.hoikueiken.com/index.html>）
- 特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会 H P （<http://www.j-shine.org/>）
- 文京学院短期大学 H P （<http://www.u-bunkyo.ac.jp/>）

\* 上記の他、本文中に記載の各短期大学のホームページを参照